本施設に関わった方々とともに。右から宮下さん、樫本さん、吉田さん

ウッドデザインの進化を訪ねて
無印良品 イオンモール橿原 OpenMUJI
2025年受賞　優秀賞（林野庁長官賞）

JAPAN WOOD DESIGN AWARD

店舗と地域、森林をつなぐ拠点として

大型商業施設の中央に、静かで、あたたかく、思わず足を止めてしまう場所がある。奈良県橿原市の「無印良品 イオンモール橿原」内に誕生した「OpenMUJI」は、吉野材をふんだんに用いた木育広場である。木の香りや手触りを通じて、地域の森林、林業、そして未来の環境までを感じさせる、開かれた“居場所”となっている。

木材利用の価値を空間デザインとして高いレベルで体現した作品として、ウッドデザイン賞２０２５で優秀賞（林野庁長官賞）を受賞した。空間デザインに関わった株式会社良品ＩＡ統括部の宮下潤也さんはこう語る。

「この施設は、無印良品として世界最大規模の売場面積を誇る店舗です。計画のなかで、動線上もっとも人が集まりやすい中央部に、売り場ではない木育広場を設けたことは象徴的だと思っています。これまで弊社が大型店で取り組んできた木育スペースの延長線上にありながら、今回はOpenMUJIという“広場”の思想と統合した初めての試みでもあります」。

同施設は、地域や社会と店舗をつなぐ拠点として木材利用や森林との接点、地域産業との連携を巧みに取り入れた事例なのである。

静的な設計が生む、行動の変化

同施設の設計において特筆すべきは、「子どもが走らない」空間構成である。宮下さんは続けた。

「店舗内でありながら、できる限り自然に近い環境をつくることを重視しました。スケール感は「家」。走り回るための広場ではなく、腰を下ろし、手を伸ばし、じっくり木と関わるための空間です。このサイズ感が、子どもたちの行動を自然と変え、親にとっても安心できる場となっていると思います」。

トップライトから注ぐ自然光、その光を受け止めるように配置された家の形を模した木の構造体が、小さな集落のような風景を生み出している。この構成により、空間は細やかに分節され、子どもたちは家にいるかのような気持ちで、積み木や木製楽器といった静的な遊びに集中する。大人も同じ空間に滞在し、子どもを見守りながらくつろぐことができる。

家のスケールを活かし、ゆったりくつろげる空間

木質化を「構造」として成立させる

本プロジェクトにおける木材利用は、構造体、什器、遊具に至るまで、こだわりが詰まっている。触れる、座る、寄りかかるといった行為のすべてが木を介して行われることで、利用者は無意識のうちに木に包まれる。施工を担った株式会社関西工務店取締役の吉田雅典さんはこう語る。

「仕上げにおいては、過度な均質性や美観の維持を目的とした加工は避けるように配慮しました。赤身と白太の混在、節や木目の個体差を積極的に残し、経年による傷や凹みも空間の履歴として受け入れることで愛着につながります」。

子どもを守る柔らかな曲線を活かした空間づくりはなかなか苦労したそうだ。木材を時間とともに価値を蓄積する素材として扱う姿勢の表れである。

吉野産材と地域林業の現在地を示す

本施設のもう一つの柱が、奈良県吉野地域の木材を中心とした地域産材の活用である。吉野杉・吉野檜は、長伐期施業によって育てられた高品質材として知られ、日本の林業文化を象徴する存在でもある。吉野製材工業協同組合・吉野ウイング事業部の樫本昌幸さんはその思いをこう語ってくれた。

「本プロジェクトでは、製材、加工、施工を地域内で完結させる体制が構築され、「オール吉野」と呼ぶべき取り組みが実現しました。意匠性の高い材だけでなく、これまで用途が限られていた材や端材も積極的に活用しています。吉野産材としてもこれだけもボリュームで使う機会は貴重でした。多くの子どもたちにこの空間を通じて、吉野の森林のこと、この地域のことを知って欲しいですね」。

家のかたちをした什器を構成する格子は橿原を象徴する今井町の格子の街並みをモチーフとしたもの。地域の歴史や文化を吉野産材との触れ合いを通じて感じてもらい、地域林業の理解醸成にも貢献する実践的な取り組みである。

格子のデザインは地域の伝統建築から受け継いだ

継続的関係性を前提とした地域連携

本施設の評価を高めているポイントが、完成後も継続する地域との関係性である。木工作家によるワークショップ、演奏会、読み聞かせといったイベントが定期的に開催され、遊び場だけではなく、地域人材の活動の場としても機能している。

広場は演奏会を始め、イベントを通じて地域との交流の場として使われている

また、同社が吉野地域のイベントや取り組みにも参画するなど、双方向の交流が生まれている点も重要である。これは、木材調達が空間づくりのためのプロセスのひとつに留まらず、文化的・人的なネットワークを育てていくきっかけになることを示している。

ここでは木育をあえて教育的プログラムとして明示せず、木の香り、手触り、音といった感覚を通じて木を理解する。この「意識させない木育」は、日常生活の中に木材利用を自然に組み込むために重要なことだと感じた。

炭素固定という環境価値の提示

木材利用の環境配慮的側面として、炭素固定の意義も本プロジェクトでは重視されている。木材は成長過程で吸収した二酸化炭素を内部に固定し、建築や空間に用いられることで、その炭素を長期間大気中に戻さない。

広場の一角にその取り組みを示す表示があった。JWL（Japan Wood Label：ジャパンウッドラベル）は、日本の木を使っている建築、内装、製品を判別するためのラベル、WCL（Wood Carbon Label：ウッドカーボンラベル）は、木を使った建築、内装、製品がどれくらいの炭素を貯めているかを可視化するラベルである。

国産材利用や炭素固定を示す取り組みを可視化

本施設の木材利用による数値がさりげなく提示されていた。環境配慮を強調しすぎることなく、心地よい空間体験の背景として伝えるという手法は、今後の木材利用促進において示唆的である。

実装型ウッドデザインの好例

本施設は、木材利用を「理念」ではなく「実装」として成立させた点において、高い完成度を持っている作品である。商業施設という公共性の高い場で、地域材利用、林業支援、環境配慮、コミュニティ形成を同時に成立させている点は、まさにウッドデザイン賞の目指す方向性を示している好例と言えよう。

木材を使うことが、森を守り、地域を支え、環境負荷低減につながる。その循環を日常の風景としてデザインする。取材を受けていただいた方々が「こうした形で自分の仕事や地域のことが認められたことが関わった者の喜び」と強調されていたことが心に残った。

これからも地域と森林、林業のDNAを伝えていく